



教職大学院 Newsletter

No. 116

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2018.11.10

附属義務教育学校について思うこと

福井大学教育学部附属義務教育学校長

福井大学教育学部教授

大山 利夫

平成 25 年度から 3 年間附属小学校の校長を兼務し、その後の 2 年間も附属学園室の一員として附属学校に係わってきました。このため、附属小中学校が義務教育学校に移行した経緯については理解しているつもりです。小中一貫となることでカリキュラムの連続性が担保され、中 1 プロブレムなどの問題の解消につながるというメリットはありますが、同時にある程度の混乱が生じることは避けられないだろうと予想していました。他大学の附属学校でも小中一貫校に移行する計画を持つところがいくつかありますが、全附連の校長会でいつも話題になるのが小学校と中学校の教員文化の違いです。子どもの発達段階によって教育内容や方法、子どもとの拘わり方にも違いがあるのは当然ですが、とりわけ小中一貫校の場合は 9 年間の子どもの成長と学びを見通すという視点が必要になります。日本の学校教員の多くは小学校、中学校、高校のうち一校種のみで教員生活を送りますが、幸いにも福井県の場合には多くの教員が小中の教員免許を持ち、小中校種間での異動もあります。現に本校の前期課程の教員には、中学校での勤務経験をもつ方も多くおりますので、小学校と中学校の二つの教育課程を円滑に繋げるといふ点でも力を発揮していただけたと思っています。これに加えて今年度中に前期課程と後期課程の校舎の間に管理棟が完成し、職員室も一つになりますので、教員同士の連携がより円滑になり、これまでとは違う新たな教員文化が生まれるかも知れません。また来年度から教職大学院の一部の教員も本校に常駐するという事なので、本校の教育実践研究と教

師教育の取り組みがさらに活性化することが期待されます。

義務教育学校となって 2 年目となる今年度から新たな取り組みが始まりました。一つは前期課程高学年における教科担任制の導入です。高学年には落ち着いたクラスもあり、教科担任制がうまく機能するか不安な点もありました。実際に授業が困難となるケースもみられましたが、教員の皆様の努力のおかげで、ようやく子ども達もこのシステムに慣れてきたというのが私の率直な印象です。もう一つの取り組みは、前期課程における社会創成プロジェクト科という探究型学習の導入です。これは前期課程にとって大きなチャレンジで、これまで後期課程で実施されてきた学年プロジェクトのベースとなる力を涵養するための取り組みとなります。これらの前期・後期を通したプロジェクト型学習については文科省の研究開発校の指定を受けており、これからの成果に期待したいと思います。

ところで、4 月から義務教育学校長を引き継ぎ、半年間学校の様子を観てきたところですが、意外

内容

- 巻頭言 (1)
- 院生 自己紹介 (2)
- インターンシップ/木曜カンファレンス報告 (3)
- ミドルリーダー・マネジメントコース便り (7)
- 10 月 月間合同カンファレンス報告 (9)
- 信州ラウンドテーブル報告 (13)
- 福井大学附属義務教育学校公開案内 (18)
- スケジュール (20)

と新鮮に思えたことは「自主・協同」を校訓とする学校文化でした。この間、附属中学同窓会の方たちと懇談する機会がありましたが、その中で必ずと言ってよいほど「自主・協同の言葉が出てきました。この校訓が附属中出身者の心にインプリンティングされていることを改めて知らされた思いです。後期課程の生徒たちが「自主・協同」をどのように捉えているのか、生徒の間でもさまざまな考え方があるようです。しかし学年プロジェクトをはじめ学校行事やさまざまな活動においても、生徒たちの主体性が重視され、生徒もそれが当然のこととして振る舞い、教員も極力介入を控えて見守る雰囲気があります。他校に比べると本校の生徒達は少々ざわついていているという印象がありますが、規範意識が高い集団ほどこいじめなどのトラブルが生じやすいという研究もありますので、生徒達の自由な姿も寛容な眼で見れば附属の学校文化といえるかも知れません。

後期課程の生徒の活動も観るようになって嬉しかったことがもう一つあります。それは運動クラブが意外と頑張っているということです。夏には中体連の地区予選と県大会、秋には新人戦など時間の許す限り観戦してきました。附属の運動クラブは弱いだろうという個人的な先入観は完全に払拭されまし

た。県大会で優勝するレベルのチームもあり、学校内では見ることが叶わない生徒たちの逞しい一面を見せてもらいました。

最後に義務教育学校の校長が抱える難題の一つについて触れたいと思います。それは始業式と終業式における校長講話です。義務教育学校になってから始業式・終業式は前期と後期の児童生徒が一堂に会して執り行われるようになりました。1年生から9年生まで800人以上が学年順に並び、壇上から見れば、まさに9年間の子どもの成長を俯瞰することができます。問題は1年生から9年生まで理解できる話を組み立てることができるかということです。小学校を担当していたときも腐心しましたが今回はなおさらです。小学校のある先生から「校長は大学の先生だから専門の生物の話をしてほしい」と言われたことを思い出し、動植物を絡めて子どもたちがイメージしやすい話をするように努めています。壇上から子どもたちの顔を見てみると自分の無力さを思い知らされます。教職大学院の先生方にも一度は義務教育学校の校長を経験していただき、このような現場の醍醐味を味わってほしいと思います。

院生 自己紹介



西野 功泰 にしの よしやす

今年度より、ミドルリーダー養成コースに入学し、自分自身の「できること」をアップデートさせたい、市立札幌大通高等学校の西野功泰です。

生まれも育ちも北海道(道産子)の私が、津

軽海峡を渡って福井大学連合教職大学院にお世話になることになった大きなきっかけは、ひとえに人との出逢いです。

福井ラウンドテーブルや奈良ラウンドテーブルで出会った方々が「西野さんが学びたい内容は福井大学連合教職大学院で学べるかもしれない」と声をかけてくださいました。私のお慕いしている先生から

は、「同僚は隣にいらなくても良い」という言葉をかけていただいたことがあります。全国につながりを持つことで、仕事の仕方や考え方の幅もずいぶんひろがったと実感しています。

高校教員として教育実践に取り組む中で常に大切にしてきたことは、生徒たちに「様々な大人の価値観に触れさせ、生き方や働き方を考えるきっかけをつくること」そして「疑似体験ではなく本物の体験をさせること」です。

本校は、単位制・三部制(午前・午後・夜間)・定時制の学校で、在籍生徒数は1,100名余の大規模校です。年齢、学習経験、進路目標、家庭環境、心身の状況、文化的背景など多様な生徒達が、共に学べる環境を実現すべく2008年に開校しました。不登校や長欠を経験した生徒の割合は高く、それらをサポートする体制も整えています。

私はそこで、生徒たちが高校在学中に自ら選択した授業、校外学修プログラムやその他の活動を通じて、主体的に学校内外を行き来しながら「本物の体験」を通じて学ぶ仕組みづくりのコーディネートに取り組んでいました。

今後は、コーディネーターの輪を広げ、後進を育てていくためにも、自らの実践を省察し、その意味を理論的にまとめていく必要性も感じています。

また、札幌市において、特別支援教育や貧困問題も看過できない重要な課題であり、その地平で生徒たちが主体的に生き方や働き方を切り拓く教育を目指すことも本校のミッションであると考えています。

そのために、これまで以上に教育のリアリティ（生徒が抱える諸問題）と社会のリアリティ（社会が抱える諸問題）を踏まえたうえでのカリキュラム・マネジメントや社会との接続をしっかりと検討し、実践していきたいと考えています。

教職大学院では、職業・進路・人生を大人と共に考える場の創造、地域社会を創造する学習活動のデザイン、そして地域社会を創造するプラットフォームの構築などを研究していこうと、欲張りな考えを持っているところです。限られた時間を有効に使い、皆さまと切磋琢磨しながら、互いに高め合っていきたいです。

どうぞ宜しくお願いいたします。

インターンシップ/木曜カンファレンス報告

気づきから行動を見直す

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立福井東特別支援学校 藤田 彩恵

紅葉の季節を迎えました。インターン先の先生方は、子どもたちに合わせて、様々な素材を教材に変身させていらっしゃるの、美しく色づいた葉っぱや枝などが、学校の中に舞い込んでいます。

「インターンシップ・木曜カンファレンス報告」として、木曜カンファレンスの企画・運営をきっかけに得た気づきを記します。毎週木曜日に9時から17時にかけて行われるこのカンファレンスは、授業研究・教職専門性開発コースの1から3年目全員が出席します。内容は、インターンを通して考えたことを話し合ったり、単元の中で学ぶ子どもの思考過程を意識しながら授業をつくったりなど、異なる特徴を持つ4つの時間で構成されています。

M2となり、その企画・運営を中心的に担う立場になりました。「院生全員にとってよりよい時間に」という強い思いを持って、4月にスタートを切りましたが、夏に自身の行動について振り返ると、大切なことを見落としていたことに気づきました。それは、①他者に伝わる言葉を使用すること、②自分の行動を絶えず調整することの2つです。

実は、私が企画・運営に特に携わっていた午後の2こま目の「授業づくり」では、院生の中に学びが消化

不良になった人を生み出していました。会議の時間を増やし、精一杯企画・運営を行ってきただけに、その事実をはじめは素直に受け取れない自分がいました。

しかし他者に話を聴いていただく中で、その事実を受け止め、これからの自身の行動を変えていきたいと考えるようになりました。そのような決意を持って、自身の運営・企画の姿を分析したときに、出てきた言葉が先ほど記した2点です。

「①他者に伝わる言葉を使用すること」という言葉が出てきたのは、次のような事実からでした。その事実とは、自分たちの行う活動の流れ全体を自分が理解することに時間を注ぎ、どのような言葉を使用すれば、相手（院生全体）に伝わるのかを吟味できていなかったというものです。「自分がよく理解していなければ」という思いに止まり、「自分が理解したことを相手に伝わってこそ、よりこの時間が有意義になる」という点に気づけずにいました。

2点目の「②自分の行動を絶えず調整すること」という言葉は、院生全体の反応を受けとめ、進行内容を変更したり、その後の活動を軌道修正したりすると

いう柔軟さが欠けていたと反省し、出てきた言葉でした。

現在、「授業づくり」の企画・運営を行う中でこの2点が十分でなかったことを受けとめ、木曜カンファレンスやインターンシップ、自身の参加する他の活動において意識しています。この2点というのは、「当たり前」という言葉でまとめてしまえば、その枠をはみ出すほどの気づきではないかもしれません。しかし、自身の過去を振り返り、今思いを新たにし、意識して行動する日々は、自分にとって充実した時間であるように思います。

私はこの経験から、できなかった・分からなかったことが、分かる（「現時点での自分なりの答え」という意味です）ことになる喜びを感じました。そして、この分かったことをもとに、自身が行動としてできるようになると喜びは増すと共に、時間をかけて自身にとって当たりの行動となり、また新たなできない・分からないに出会って、自身を成長させていくように思います。

このようなことを記していますと、喫茶店において出会った方に聞いたある話を思い出しました。その方は、仕事で様々な人にインタビューする機会があるAさんです。Aさんは聡明な方で、喫茶店で出会ったときに、話をお聴きできることをとても嬉しく

思っていました。私は、Aさんに「インタビューをしたことのある方で、一番印象的であった方はどなたですか？」と質問したことがあります。すると、Aさんは「Bさんです。」と福井県にゆかりのある著名なBさんの名前を口にしました。「Bさんのどのようなところが、印象的であったのですか？」と聞くと、Aさんは少し考えてから、「Bさんの使う言葉は、“とても分かりやすい”のです。」と答えてくださいました。多くの人にインタビューをし、相手を知る機会があったAさんにとって、印象的であったのは、「分かりやすいことばを使う」というBさんの語りであったというこの話は、私にとって忘れられない話となりました。

上記の喫茶店における話は、Aさんという一人の人の考えであります。しかし、私は木曜カンファレンスの運営・企画での経験を通し、相手のために分かりやすい言葉を使うこと、分かりやすい活動内容を設定することは、多くの人にとって有意義な時間を作り上げるために大切なことであると考えます。

教職大学院に在籍してからの日々を振り返ると、「ここ（教職大学院）で学ぶことを決め、本当によかった」と感じております。現在の環境に感謝し、経験しながら得た気づきを自分のものにしていきます。

自覚

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市明新小学校 山崎 洸亮

10月半ばから後期がスタートし、今年度も折り返しの時期となった。昨年は3年生のクラスに入らせていただき、教師という職業の喜びや大変さを傍で目の当たりにしてきた。そして、教師の一員として、学校現場の組織の一人として求められること、責任という面でも、様々なご助言や厳しいお言葉をいただいた。昨年は、何も知らない自分にとって、ただただ先生の成せる業に感心し、インプットに必死な1年になったと思う。今年は5年生のクラスに入らせていただいている。今年ははじめて毎週のように授業実践をさせていただいており、自分で実践したからこそわかることも多く、アウトプットが多い1年としてまた違った学びを感じる。授業実践をする中で、授業に対する緊張も以前より和らいできたし、「この授業で子ども達に何を残すか、何が残ったか」「どう評価するのか」を段々と意識するようになってきた。教員として働くまで残り5ヶ月を切ったた

め、「担任として自分ならどう動くか、何を指導するか」を考えながら、今だからできるトライ＆エラーを積み重ね、自信にしていきたい。

インターンシップの他にも、大学院2年目の今培っている最中の力がある。それは、話し合いの場をコーディネートする力だ。毎週木曜日に行われるカンファレンス（木カン）では、ストレートマスター（SM）2年生が木カンの企画・運営を担っている。木カンでは、インターンシップでの悩み・葛藤・学びなどを話し合う「学びの振り返り」の時間や、ある教育的な概念について（例えば「理想の教師像」「褒めること、叱ることについて」「協働とは何か」など）をテーマにして院生同士が探り深め合う「主担当企画」の時間などの4つのコマに分けられる。それらによりよい学びを得られるために、2年生は各コマの担当に分かれて院生同士で会議を重ね、木カン当日はファシリ

テーターとなって議論を円滑に進めることに努めている。

さて、4月から6人の後輩を加えて木カンも新体制でやってきたが、「何のためにこの時間があるかわからない」「話すだけのただ辛い時間になっている」などの不満が1年生から漏れ始めてきた。また、コマごとに編成されたチームで会議をしていたが、互いに気持ちがすれ違い、自分以外のコマの運営方法に互いに不満を漏らし合うことが増えてきた。そこで、夏休みに入る前に、木カンの各コマについてどんな思いを持っているのかを院生に聞き出すためにアンケートを実施した。もともと自分以外に「今のままでは木カンがまずいね」「アンケートとった方がいいかもね」と感じている院生がいたことが後押しになり、あまり行動力がない自分が（行き当たりばったりではあったが）「アンケートを実施しよう」と声を上げ、フォーマットを作ることができたのは、自分で自分を褒めてあげたいと思う。そこから、集計を行ったり、集計結果について考える会議を設定してくれたりしたのは他の院生であったため、周りに助けられたなと思った。アンケートを作り、現状を共有することができたのは、「自分がやらないと始まらない！不器用でもいいからやってみよう！」という気持ちが働いたからであり、みんなも同じような気持ちを持っていたからなのかもしれない。

2年生同士で夏休みに行われた、アンケートの結果から木カンの向き合い方を考える会議では、他人のせいや他人任せにすることなく「自分事として捉えよう」という方向性を2年生全員で改めて共有した。そこから始まった後期では、まだ「自分は今他の人に任せてしまっているな」と反省するところは時々あるが、以前よりも少しずつ「自分事」として考えられる癖はついてきたと思う。組織を動かす1人として「自分はどう動かすか」を考え続けていきたい。

この「自分事として捉える」ことは、木カンだけではなく他の場面でも重要だ。インターン先でも、自分が子どもに注意せず担任の先生に注意を任せてしまう私の癖は、これまでその子ども達の成長を自分事として捉えられていなかったからだと思う。おそらく自分が担任なら躊躇なく注意しているだろうからだ。また、授業中に先生やクラスメイトの話を聞くことができない子どもも、「その話は自分に関係することだ」という意識を持ちにくいからなのだろうと思う。夏休みの会議を終えてから、「自分事」「自覚」というキーワードの必要性をあらゆる場所・場面で感じるようになった。

話は変わるが、私が数年前子どもと係わるボランティア団体に所属していた時にお世話になった人が以下のような話をしてくれた。

何人もいる部屋の中で、「あそこの窓を閉めて」と言うとする。すると、窓から近い人は窓を閉めに行くけど、窓から遠い人は大抵閉めに行かないよね。窓を閉めに行かない人が悪いわけじゃないけど、窓から近い人は「この中で自分が一番窓に近いから自分が閉めなきゃ」と無意識に思って閉めに行くんだよね。これが「自覚」なんじゃないかな。

「自覚を持つ」という言葉を深く考えずに使っていた私は、この話を聞いて初めて「自覚」という言葉の意味を理解したような気がした。「自分に言われているんだ」「自分がやるんだ」という意識こそ、「自分事」として捉えることであり「自覚する」ということなのだ。

教師になるまで残り5ヶ月を切った今、私は学校という組織で、院生という組織で、窓からどれくらいの距離にいるだろうか。問題や課題を自分事として捉えられているだろうか。自覚はあるだろうか。責任感があるだろうか。

問い続ける姿勢

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校 津野 慎平

福井大学教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学して、早くも半年が過ぎました。入学した当初は、右も左も分からない状況で常に先輩方やインターンシップ先の先生方に教えてもらうということが続きました。おかげで、少しずつ自分が何をすべきか、何をしないといけないのかという部分が以前よりは見えてくるようになってきました。ま

た、それと同時に少しずつ自分のできないこと、力が及ばないことなどの課題も少しずつ見えてくるようになってきました。

インターンシップ先では、子どもたちとの関係づくりに課題を抱えています。まだまだ子どもたちの状況や心情を読み取ることが上手くできず、私の思いと子どもたちの思いがすれ違うことが多々ありま

す。すれ違いが多くなると、子どもが辛いのはもちろんですが、私自身も辛くなってしまい、自分の何に原因があるのか、何を悩んでいるのかわからなくなってしまうました。辛くなるうちに段々と、インターンシップの日々をただただ乗り切るという考えになってしまっていることに私は気付きました。

ある放課後、私の先輩が、私が悩んでいることを知って、話を聞いてくれました。会話の内容は少し違うかもしれませんがニュアンスは同じです。先輩「津野は、何に悩んでいるの？」津野「うーん、子どもたちと関係が上手く築けていなくて・・・」

また（メンターの）先生と子どもたちとの関わり方を参考にしますが、自分に置き換えると難しくくて・・・私の立ち位置がどのようにあればいいのか分からなくなっています」先輩「（メンターの）先生には相談したの？」津野「放課後に少し相談することはあるのですが、自分だと違う風に考える場面もあって結局どのようにすればよかったのか分からなくなります」先輩「じゃあ違う風に考えたときとか先生の関わり方が難しいと考えたときとかは、津野は何に一番重きを置いて考えていたの？去年から先生を見ている限り先生は安全に特に重きを置いて普段行動しているように見えるけど、違ったり難しいと考えたりする津野はどこに重きを置いて行動したいの？」私はそのとき分からなくなり、はっきりと答えられませんでした。先輩は「そこかもしれないね、津野の、先生として一番大事にしている核のような部分が分かったら、自分がどうしたいのか、自分と子どもたちがどうやって関わっていききたいのか見えてくるしどうすればいいのかって部分も見えてくるよ」と教えてくれました。

ある放課後の先輩との会話から、私は自分探しが始まりました。私は何を大事にしたいのだろう？人間としての軸って何なのだろう？学校の中で何をしたいのだろう？また、何でそれをしていきたいのだろう？色々な疑問が急に押し寄せてきました。段々と先生になりたいと考える理由もわからなくなり、時には先生になんたくないのかもしれないと安易に結論付けてしまうときもあったり、考える

ことをやめてネガティブな発言をしてしまったりとより自分が分からなくなりました。

私は、今までの自分の活動歴を振り返りました。自分の今までしてきたことは何だったのだろう？そのきっかけは何だったのだろう？中学校や高校での部活、大学での活動やサークル、卒論、そこから見えてきたことは、私は今まで「楽しい」「面白い」と感じたものを続けているということでした。私が「楽しい」「面白い」と感じた先にもっとやってみたいと考え、続けていくということが分かりました。また、子どもたちを見ている私は、子どもたちの「楽しい」「面白い」という反応を見ていたり、一緒に共有したりすることを好んでしているということが分かりました。これらから、「楽しい」「面白い」が私の人間としての軸を考えるうえでのヒントになっているのではないかとすることに気付くことができました。

自分の悩みや課題から、先輩の言葉をきっかけになぜその悩みや課題があるのか、その根底にあるものは何であるのかというように自分に問い続けることで、自分の核となるもののヒントをつかむことができました。自分の課題意識や周りの人から得られる助言から、自分の人間としての軸を明確にしたり更新したりしていくことは、自分の行動の判断基準より良くするために必要なことだと私は思います。もちろん、自分に問い続けることは必要なことではあるものの、自分を責め立てているようで辛いことだとも思います。しかし、問い続けることによって見えてくるものは多いことを私は学びました。自分に対して、何が大事なのか？何に重きを置いているのか？と問い続けなければ、「楽しい」「面白い」というような私の人間としての軸となるヒントは見えてこなかったように思います。

これからは、見えてきた「楽しい」「面白い」が自分にとってどういうものであるのか？子どもたちの「楽しい」「面白い」は将来何につながるのか？などを自分に対して問い続けていきたいと思っています。また、常に自分に問い続ける姿勢を持ち続けていきたいと考えています。

ミドルリーダー・マネジメントコース便り

近況報告

学校改革マネジメントコース2年/福井県立羽水高等学校 川崎 直樹

ついこの間、福井大学連合教職大学院のお世話になり始め、長期実践研究報告などまだまだ先の話…と思っていたのに、もう執筆に取りかからなくては間に合わない時期になってきました。本当に早いものです。同僚には「修論、大変だね?」とよく言われるのですが、実はまだ全然大変ではなく、大変ように見えるのは別件でドタバタしているからで、これからいよいよまとめにかかったらどうになってしまうのか?と漠然とした不安が募る日々です。

さて、我が羽水高校 I S N 事務局では、3 年近くにわたってプロジェクト学習 (PBL) のカリキュラム開発と実践を行ってきました。今はその PBL を経験した第 1 期生が大学受験を迎え、推薦入試対策の真っ最中です。志望理由書の作成や面接練習などで学校中が騒然とする中、あちこちから「私は 1 年生の PBL で市役所に…」とか「2 年の探究論文のテーマとして僕は…」などという声が聞こえてきます。そうした声を聞くと「ああ、見よう見まねで始めた PBL も、少しは彼らの役に立っているのだな」と思います。もちろん実践を通じて生徒たちがどんな力をつけたのか、もっときちんと測る必要があるのですが、昨年までの 2 年間、我々が夜遅くまでうんうん唸りながら考えたことが少しは報われたようで、隣の席の N 先生とこっそり喜んでいました。私の席の後ろでは、今年から 1 年のカリキュラム開発担当になった T 先生と、2 年のカリキュラム開発担当になった K 先生が「来週の PBL どうしよう!」と、今も頭を抱えているわけですが…。今年新たに I S N 事務局の

仲間になったこの 2 人はとても真面目で、少しでも PBL のカリキュラムを良いものにしようと、若手らしい新たな発想をどんどん取り入れてくれています。そのせいで毎回指導案や教材を新たに作り直す羽目になっているのですが、これこそが PBL だ! と私は思うわけです。つまり我々 I S N 事務局は、PBL カリキュラムの開発という PBL に取り組んでいるわけで、今年は本当に若手 2 人の取り組みからいろいろ学ばせてもらっています。

さて、そんな I S N 事務局ですが、今年度に入ってから、「新学力観」「授業の見直し」などをテーマに自主研修会を開催するようになりました。福井大学連合教職大学院の先生方にもご協力をお願いし、グループワークを取り入れながら、まずは自分たちの取り組みを振り返ってみたいところから始めています。教職員数 70 名の大所帯で、各部署・各科目の結びつきが強い我が校ですが、こうした機会を使って、これまであまり語り合うことのなかった者同士が語り合うことは、恐らくそれぞれにとって良い刺激になると思います。今後も、気楽かつ真面目に会を運営し、新たな学び合いを生む契機にしたいと思います。

実はこの 3 年間「ここはこうすれば良かった」「もっと時間があれば」「これ意味あったのかな」などと後悔や反省する機会が以前にもまして多くなりました。ただ、こうして強く自分の実践を振り返ること自体がこれまでは少なかったわけで、齢五十にしてこうした新たな挑戦をさせていただいていることに感謝せねばならないと思っています。

学校改革マネジメントコース2年目にあたり思うこと

学校改革マネジメントコース2年/福井県立福井東特別支援学校 岸野 美佳

福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学して、早いもので1年と半年が経った。1年目は、特別支援教育センターという相談機関に在職中だった。教育相談に携わる立場から「管理職や特別支援教育コーディネーターの先生方、学年主任の先生方が学校の中核となって校内支援体制を整えてください」「担任は気がかりな子どもをクラスで抱えています。担任や子どもを孤立させないように支えてあげてください」と、学校現場のキーパーソンとなるたくさんの先生方に校内支援体制整備をお願いし、相談校へ定期的に訪問をさせていただいた。その際、管理職の先生がお忙しい中時間を割いて、学校の組織や運営をどのようにマネジメントしておられるのかをお話してくださり、私は、そのご苦労やご経験に裏付けられた知恵・工夫に引き込まれ、記録をとるのもすっかり忘れてしまっていることが多々あったことを思い出す。

さて、2年目となる今年度、7年ぶりに学校現場に戻り、これまでは学校組織や学校運営に携わる先生方への聞き役や相談役だった私が、その業務に携わる立場となった。当たり前のことなのだろうが、学校のマネジメントを“聞く”のと実際に“やる”のとは全く違うのだということを、ひしひしと感じる毎日である。学校を改革・マネジメントすることの重みや責任を引き受けるには、まだまだ度量や学びが足りないことを実感する次第である。

私が今考える本校の学校改革マネジメントの軸の一つは、校内支援体制の整備である。担任だけが抱えるのではなく先生方同士が支え合って子どもを見ていく仕組みを、体制として整備することである。もう一つは、授業づくりである。子どもの授業中の発言や行動（発声や微細な動き・視線・表情も含んだ）から授業をふり返り、子どもたちが参加できた・楽しい・分かった・もっとやりたいを引き出せる授業をみんなで作っていくことである。今ようやく軸をすえたところで、私自身の実際の役割を模索している。

校内でもっと子どもの話や授業の話が盛んに行われ、活性化していくには…。学部会や校務部会はまだ

ろん、ケース会や授業研究会などでの話し合いを充実させていきたいと思っているところだが、一方で学校現場は多忙化解消に向けた働き方改革が喫緊の課題でもある。若かった頃は時間も気にせず延々と子どもや授業の話をしていたものだが、今は管理職のマネジメント力が問われている。では、効率よく、しかも内容の濃い会議や話し合いにするためには…。参加者が会の目的を共有すること、会の進行やまとめをするファシリテーターの役割も重要であること、効率性も大切だが、参加者、特に若手の先生方が年齢や経験を超えて自分の意見を言えたり、意見交流の中から学んでもらったりすることも重要ではないか等々。活性化と効率化のバランスも悩ましいところである。

まとまらない思いをつらつらと綴ってきたが、こんな私にとって月間カンファレンスは力を抜いて不安や迷い、少々の実践を語ることができる、傾聴してもらえる貴重な場となっている。特にストレートマスターの院生さんが語る‘木カン’やインターンシップでの学びは、聞いていて大変新鮮で参考にさせてもらうことも多い。このような若い先生方とミドルの先生方が一緒に学び合いながら職場にも活力を与えられたらいいなあなど思いを馳せることもしばしばある。

学校改革マネジメントコース2年目にあたり、答えを教えてもらって学ぶことだけが学びではなく、迷走したりときにはもがいたりしながらも「省察的实践者」（『省察的实践者の教育』ドナルド・A・ショーンより引用）でありたいと思っているところである。夏季集中では全く読破できなかった書籍を自分自身の糧にするのは大変申し訳ない気持ちだが、お許しいただきたい。マネジメントする立場にあっても不完全であっていいし、先生方と意見を交わしながら省察的实践者として協働していくことが、今私にできることではないかと思っている。あと半年、マネジメントコース2年目の先生方と語り合い、思いを共有できるチャンスもきっとあると思うので、横のネットワークも是非作っていききたいと思う。

10 月 月間合同カンファレンス報告

傾聴→学び合い←開示

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市中藤小学校 松木 巧

10 月の月間合同カンファレンスのテーマは『新しい世代を支え学び合う』である。私は色んな人たちの考えを吸収してきたし、学び合いはできている方だと思っていたが、本当にそうなのかと考えさせられる時間となった。

東京大学附属中等教育学校の福島先生からは、若手教員の時は子どもの輪の中に入りこんでいたこと、今は若手教員の思いを知るため、話しやすい雰囲気をつくるようにしていることの話があった。

若手の時は、子どもの立場に立ちやすいよさがあるのだと思う。それはきっと、歳が近いほど思考や感覚も近いからだと思う。一方で、歳の離れた人の思いを理解するには、思いを推測したり、引き出したりする雰囲気や関係づくりがより重要になる。したがって、教員経験を積んでいく中では他者理解のための傾聴力を培っていく必要もあるのだろうと考えた。

高浜小学校の佐藤先生からは、ある子どもとの関係について悩んでいた新任の先生を、他の先生たちと支援した話があった。その中でも、新任の先生はダンスが得意だと知った佐藤先生がダンスの指導を任せると、関係性に悩んでいた子どもが乗り気で参加したことで雰囲気がよくなったという話が印象的だった。

これは、佐藤先生が新任の先生の持ち味を見抜き、それを生かす場を提供したことで、事態が好転した実践だと考えた。先生として働くうえで、自分の持ち味を生かす機会があることは大きい。得意なことを活かした活動に対して好意的な反応が返ってくることは、立場によらず人として自信につながる。子どもとの関係性に悩む中で失われていった自信を、この出来事で回復することで『新しい世代を支え』たのだと考えた。

埼玉県から円山小学校にきている山下先生の話では、埼玉県と福井県の若手教員の印象についての話が興味深かった。両県を発展と継承の 2 つのキーワードで考えると、埼玉県の若手は前者、福井県の若手は後者の印象が強いらしい。継承性が強い福井県は、先輩教員が若手教員を育てようという意識があるの

で、学級経営などの形が身につく。しかし、チャレンジな実践は埼玉県の若手教員に比べて少ないと感じているようだった。

私はインターンが始まった当初、先生の関わりを真似ることを意識していた。しかしそれでは子どもとの関係がつかれず、自分の持ち味を考えて関わりや授業をするようになった。継承されたことで足場を固めてから自分の色を出していくことが、自分が教師として育つ道筋になるのかもしれない。そうすると、様々な先輩と関わり合っただけのものを吸収していく姿勢がまずは大切そうだ。教員としてスタートを切る際の心構えが、1 つははっきりした気がした。

教師の学び合いというのは、お互いに情報を提供し合い、それぞれの形で生かすことだと考えていた。しかしその中身を考えて、相手の状況や求めを考慮して情報を提供することや、話しやすい雰囲気や関係をつくることなど、学び合いを生むための環境づくりがあると分かった。ここまで書いて、これらは週間カンファレンスの運営に携わる中で、私が大切にしていることだと気付いた。また、インターンでメンターの先生方にさせていただいていることだとも考えた。相手を知り、思いに沿ったものを提供する。そのために傾聴し、応えようという姿勢で関わる。これが互いにできることで、よりよい学び合いが構築されるのかもしれない。

午後のグループは、幼児教育に携わる先生方とお話させていただいた。

さくらこども園の小川先生からは、園で行われている研究の話をしてもらっても反応の薄い保護者の姿から、子どもや保護者のニーズを考えた保育教諭になりたいという話があった。

保護者の反応が薄いのは、園として話すことと、保護者の求めている話がズレているからだと思う。このズレはどうして起きるのかを考えた時、私は互いの意図が十分に開示されていないことで、園での取り組みによって我が子がどう成長するのかが分からないからではないかと考えた。

では、どうしたら意図が十分に開示され、相手に伝わるのだろう。私は、彼我の間にある共通した目標を明確に、それぞれが行っている取り組みを伝えられるとよいと考えた。実情は分からないが、園での取り組みによってどんな力が身につくかが分かれば、保護者もその取り組みに理解を示してくれるのではないだろうか。またこのように「〇〇が育つために～をしている」という話がお互いにできれば、互いの取り組みや悩みといった情報を交換できるのではないだろうか。

明確な目標に資するための取り組みやその意図を開示し合い、傾聴し合う。そこで得られたことを取り組みに生かす。これが学び合いであり、繰り返すことで取り組みが支えられていく。その土台には関係づくりが不可欠であり、その方法は相手によって様々だ。学び合いをデザインし、発展させていくことの奥深さとともに、自分が如何に浅慮に学び合いと言っていたかを知ったカンファレンスだった。

「意欲と本音から学び合う」

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市至民中学校 渡辺 頑太

今回の合同カンファレンスのテーマは「新しい世代を支え学び合う」であった。新しい世代とはまさしく私たちのことである。私自身、支えられていると感じる場面はいくつもある。実習先である至民中学校の先生方や大学院の先生方もそうである。どちらの場でも私が学ぶためにバックアップをしてくれていることに感謝している。今回は自分自身が受けている支えを語り、また他の先生方がどのように支えているのか、支えられているのかを知っていきたいと心からそう思った。

セッション1でのグループは私を含めて若手の方が2人、学年主任や研究主任をされているベテランの先生が2人のグループであった。グループで話の中心になったことが「若手の育成では研究会をしたいのだがどのように取り入れるかが難しいので意見が欲しい」というベテランの先生の言葉であった。私自身、実習先で全体研究会にも参加しており、先生方の授業を参観させていただく機会も多い。先生方がどのような授業をしているのかがいつも気になっている。そこで、「授業をいつでも参観しやすいようにした方がいいのではないだろうか」ということを言わせていただいた。授業を見合う文化ができると自然に授業について話す場面が増えてくる。それは去年の数学の授業実践がそのような考えを教えてくれた。

その実践は2クラスの同じ単元の授業をお互いに見合うことであった。授業を見合った後、給食や休み時間に授業実践の振り返りを私と授業者の先生で話した。それは次の授業のヒントになっていた。授業者の先生からも「渡辺先生に参観され、参観することでもっと生徒が考えられる授業をつくっていかないといけないと思いました。こちらも勉強になりました。」という言葉がいただいた。私の学びだけではなく、一緒に実践した先生の学びになることも実感できた。これもまた、新しい世代が支えられ、学び合うということであったのだろう。この実践は二人で行ったが、数学部会の先生全員と行いたい。それが次の課題であり、学びがより深まるのではないかと考えている。

学び合いには、若い先生もベテランもお互いにどこか吸収したいと思い、本音で語らなくては本当の「学び合い」にはたどり着かないだろう。上記の授業を見合うことも、今回の合同カンファレンスもお互いが思ったことを本音で語ることができ、吸収したいという意欲があったからこそ「学び合い」になっていたのだろう。来年度からは大学院を出て現場に長く関わる。その時に、自分の思いを常に持ち、語らなくては授業の質を高めることも、子どもとよりよい関係を築くこともできない。学び合いに必要な「意欲」と「語る」ことを改めて考えさせられた今回の合同カンファレンスであった。

子どもたちの学びの場を捉え直す

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/附属義務教育学校前期課程 新谷 輝

先日、10 月の合同カンファレンスにて、私の母校である小浜市の遠敷小学校が閉校になることを安田先生よりお話していただいた。私が、大学 3 年生の教育実習で遠敷小学校にお世話になった頃には、既に「数年後には閉校になること」や「近隣の小学校と統合されること」は耳にしていた。そのため、小学生当時はどこか他人事のように捉えていた学校の閉校や統合の話題も、ここ数年は身近に感じるようになっていた。

今回のお話の中で、「はだしの広場」という校庭のことについて触れられた部分があった。学校からは少し離れた所にあるグラウンドとは異なり、登り棒や鉄棒といった遊具が設置されており、一輪車や竹馬で遊ぶことができたり、その名の通り、子どもたちが“はだしになって”遊ぶことができたりする場となっている。私も小学生の頃は、「虫眼鏡で太陽の光を集める」という理科の実験を行ったり、「お水送り用のたいまつを作り上げる」という地域の方々と連携した行事を行ったりと、この「はだしの広場」をたくさん活用していた。無くなると分かって改めて、小学生の頃に友だちと共に学び、遊んだ場所が、自分にとって如何に大切な時間を与えてくれたものであったかということに気づいた。

今回の合同カンファレンスでは、まさに、私が授業中に感じた子どもたちの学びの場についてお話しさせていただいた。先日、長期インターンシップにて、道徳の授業を行う機会があった。夏休みが明けてすぐに、私が長期インターンシップを行っている附属義務教育学校では、教育実習が実施され、私も教育実習生と共にその期間に授業を行ったのだが、私も教育実習生も課題として残ったことが、“子ども同士の意見共有の場”の設置である。子どもたち同士で、「自分たちとは異なる友だちの価値観に触れる」ということを行ってもらいたかったのだが、この意図に反して、次のような場面があった。ある子どもの考えを、授業者である私は理解することができたのだが、その子の周りの友だちは理解することができなかった。そこで、私は「なるほど、A さんの言いたいことはこういうことね。」と話を受けて、他の子どもたちに広げようとするのだが、「もっと分かりやすいように」という私の思いとは裏腹に、上手く伝わらなかったということが現状であった。

子どもたちがもっている感覚から生まれる言葉は、

私たち大人が用いるものと比べると、比較的に単純な形のものが多いと感じる。しかし、その表面上のイメージとは異なり、その言葉の中には、子どもたちが考えた様々な背景が存在しているはずである。それでは、授業者である私たちは、そういった子どもたちの背景を、彼らの発言からどのくらい汲み取ることができているのだろうか、また、できていないのであればどのように働きかけていくことが必要なのだろうか。昨年、長期インターンシップで 1 年生の学級に入らせていただいた際に、次のような子どもたち同士のやり取りを記録する機会があった。

国語の『いろいろなくちばし』という単元で、「写真を見て問題文を作ろう」という内容の学習が行われたことがあった。C1 さんが、「先生、これでいい？」と私にできたことを伝えてきたが、所定の欄に書くべき内容が間違っていたのである。すると、隣の席の C2 さんが「違うでしょ。ここは“どのような使い方”って書いてるから、“使い方”が書いてある所を探して書くの。」と指摘したのである。C2 さんは、自身の問題文の作成が速く終わったため、担任の先生の「終わった人は周りで困っている人を助けてあげて」という指示を受けて、「おたすけ役」に回っていたのである。これに対して、C1 さんが「でも、どこにも書いてなかったよ。」というように、ちゃんと探した上で考えて記述したことを伝えると、C2 さんは、「教科書と同じで鳥の名前のすぐ後に書いてるよ。ほら、言い方が似てるところがあるでしょ。」と、ヒントを伝えながら、答え(書くべき内容が記されている場所)が書いてある付近をそれとなく指し示そうとしていたのである。

先生やインターン生といった大人から指摘されたら、「先生が言うことだから」というように、子どもたちは何も考えずに直してしまいがちである。しかし、自分と同年代の友だちの言うことであれば、指摘されたことが「本当に友達が指摘した通りかどうか」を疑い、うまくいけばそこから、一緒に、「なぜそうなるか」を考えることができる。担任の先生や私などといった大人が説明するときとは異なり、友だち同士の言葉のやりとり(小学 1 年生が用いた言い回し)の方が伝わりやすいのかもしれないと感じた。私たち大人と、似通った感覚を持ち合わせている子どもたちとが、授業の中で連携できて初めて「全てを汲み取ること」につながるのではないかと思う。

自分が過ごした場所が無くなるという状況を目前に控えた今だからこそ、子どもたちには、今、仲間と一緒に学び、遊んでいる環境を大切にしてもらいたいと改めて感じた。さらに、大切にしてもらうために

も、授業内外問わずにアンテナを張り、学校生活において子どもたちと連携を図っていく必要があると考えた。

若い世代を支えるために

学校改革マネジメントコース 2年/坂井市立春江中学校 森阪 貴徳

学校現場は今後若い世代がどんどん増えてくる。それに伴い、ベテラン世代は年々減少し、若手とベテランをつなぐことが期待されるミドルリーダー世代の人数も限られてくる。今後、学校は形を変えながら年齢構成のアンバランスと向き合い続けなければならないだろう。

そのような中、若手とベテランをどうつなぐかは今後の学校経営において欠かすことができない課題である。特に年々多くなる若手を組織の中でどのように育て、生かしていくかは現在の学校現場において重要な課題の1つである。

「今の若い先生は優秀だ」という声を聞くことがある。私の学校にも多くの若手教員がおり、その言葉通りだと思うことがよくある。例えばタブレット等を活用した授業である。機器やアプリを巧みに使いこなす、ベテランとは違ったわかりやすい授業を展開している。その他にも、生徒会活動での発表等が挙げられる。ベテランではなかなか使いこなせないソフトを活用し、児童生徒を引き付けるプレゼンや動画を作成している。今後若手教員が、子どもに寄り添った柔軟な発想で学校を支え、新しい学校文化を形成してくれるのではないかと期待できる。反面、もろさもある。ベテラン教員には経験からくる対応力や幅広い実践からくるきめ細かな指導がある。これは若手教員がいくら優秀でもなかなかできることではない。本を読んだだけではわからない、経験に裏打ちされた実践だからこそ子どもの信頼をつかむことができる面もある。このようなベテラン教員の知恵をどう若手に引き継いでいくか。また、若手教員の新しい実践をどのようにしてベテラン教員に広めていくか。双方向の交流が今後の学校現場では欠かせないと考えている。

このようなベテラン教員と若手教員との交流を円滑かつ緊密にするためにも、風通しのよい職場づくりが欠かせない。若手教員もベテラン教員も忌憚なく意見を交換し合い、より良い学校をつくるために力を合わせていく、このような協働体制が必要となってくるだろう。協働体制は、普段から気軽に意見を

言い合える関係があるからこそ構築される。そのためにも月1回、30分から1時間程度、日頃の自分たちの想いを語り合う場を設定してはどうだろうか。グループの年齢構成をできるだけ幅広くし、意見批判はしないルールのもと、日頃の自分の想いを伝え合うのである。人は話をしないことで誤解が生じることが多い。普段忙しく、目の前の業務についてしか話さないようでは、よい関係には発展しにくい。現在のような余裕のない状況だからこそ、あえてこのような時間と場を設定し、相互に理解し合う関係作りに努めてはどうだろうか。

若手をどう育てるかが議論となることが多い。今回のカンファレンスでも多くの先生方が話題にしていた。その多くがベテラン教員から見た若手教員への不満である。「どう伝えてよいかわからない」「アドバイスしても聞いてくれない」等の意見があったが、そもそも「ベテラン教員が若手教員を育てる」というスタンスで若手教員に接したとき、ベテラン教員のアドバイスは若手教員の心に本当に響くのだろうか。もっと言えば、ベテラン教員の考えを若手教員に伝え、継承させることが本当により良い学校づくりにつながるのだろうか。

これからの学校に求められるのは若手教員とベテラン教員との融合であり、お互いの良さを引き出し合う組織づくりである。ベテラン教員から若手教員への一方通行の関係では協働の関係や体制は生まれにくい。若手教員から新しい発想や意見が出されたり、若手教員の考えが組織に生かされたりすることも少なくなるだろう。このような状態が続けば、若手教員の仕事はベテラン教員の考えの枠内におさまリ、若手教員の仕事に対する意欲も低下する。下手をすれば指示通りに動くだけの教員が生まれることにもなりかねない。これでは若手教員の育成とは言えないだろう。むしろ、若手教員の不満が高まれば、若手のみのコミュニティが形成され、学校内で分裂が生じる危険性もある。

そうならないためにも、積極的に若手教員に仕事を任せ、経験を積ませていかなければならないだろ

う。押さえるべきポイントは経験豊富なベテラン教員が最初に若手教員に伝え、その後は若手教員を支援する。若手教員が悩んでいるときは寄り添い、さまざまな視点からアドバイスし、若手教員に決断させる。最終的に、若手教員が自らの力で仕事をやり遂げたという達成感を持てれば、さらなる意欲向上につながるだろう。このような関係が続けば、支えてくれたベテラン教員に対して若手教員が感謝の念を抱き、より良い関係の構築につながることも期待できる。時代が変化するように、今後の学校内の人間関係も変化していかなければならないだろう。

若手教員が自らの能力を組織の中で十分に発揮し、失敗から学ぶことができる。そのような学校にするためには、ベテラン教員の立ち位置がカギになるだろう。ベテラン教員が若手教員を育てるのではなく、若手とベテランが共に学び、刺激し合う。このような関係があって初めて今後の学校は成長できるのではないかと考えている。ベテラン教員が若手教員に大切なことはしっかり伝えるなかで、若手教員が生き生きと仕事に取り組むことができる学校を創っていくことだと感じた。

信州ラウンドテーブル報告

信州大学 | 教育学部
平成30年10月20日 (土)
信州ラウンドテーブル2018

信州大学教育学部附属松本学校園
(H28 文部科学省指定 研究開発学校)
～『学びの総合化』を枢軸とした幼小中一貫の教育課程の編成～

8:20～8:50	受付	[小・中各玄関]	【保育・授業公開】 文部科学省より研究開発学校の指定を受けて3年目となります。『学びの総合化』を枢軸とした幼小中一貫の教育課程に基づく保育・授業を公開します。
8:50～9:40	幼・小・中 保育・授業公開	[各教室]	
9:40～10:10	語る会	[各保育・授業会場]	
10:10～10:30	移動	[信州大学経済学部まで徒歩約5分]	
10:30～12:00	基調講演	[経済学部 第2講義室]	
【基調講演】「子どもに培いたい資質・能力 教師が培いたい資質・能力」 福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 研究科長 松本 健一 先生 専門職としての教師はどうあるべきか。教師の仕事が省察的实践によって支えられていること、学びの成立にとって協働探究が教師にも子どもにも欠かせないこと、語り合い傾聴し合うコミュニケーションづくりが重要であること等、多くの示唆を与えてくださっている先生です。 			
12:00～13:00	昼食	[学食、広場、各会場等]	【ラウンドテーブル】 小グループでお互いの実践をじっくり語り、聴き合うことで、専門職としての歩みを振り返り、さらに探究し合える仲間の輪が広がっていく場となればと思います。
13:00～16:00	ラウンドテーブル	[理学部講義棟]	
17:00～19:00	懇親会	[信州大学教育学部附属松本学校園レストランソレイユ]	

～信州ラウンドテーブル2018 本日はご参会いただき誠にありがとうございます～

- ・名札は、終日着用をお願いいたします。午後のラウンドテーブル、懇親会でも使用します。お帰りの際、名札はお持ち帰りください。
- ・昼食は、学生食堂（あづみホール）をご利用ください。弁当を持参された方は、広場やラウンドテーブルの各会場で食べていただいても構いません。
- ・午後のラウンドテーブルは13:00より開始いたします。「テーブル・教室表（発表順）」をご確認いただき、各会場へのご移動をお願いいたします。
- ・お帰りの際には、アンケートへのご協力をお願いします。回収BOXを各校園の昇降口、講演会会場出入口、ラウンドテーブル各会場に設置してありますので、そちらにお入れください。
- ・懇親会には、当日申し込みの参加も可能です。懇親会会場の受付にて、対応いたします。
- ・駐車場内は徐行をお願いいたします。お帰りの際は、中学校正門側（西側）の出入口より出庫ください。一方通行となっていますので、右折をお願いいたします。
- ・信州大学教育学部附属松本学校園および信州大学キャンパスの敷地内は全面禁煙となりますので、ご協力よろしくお願いいたします。

主 催： 信州大学教育学部附属松本学校園
共 催： 信州大学教職大学院 福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
後 援： 長野県教育委員会・信濃教育会・松本市教育委員会・松本市教育会・松本市幼年教育研究会

信濃路に秋の深まりが感じられる10月20日(土)、長野県松本市にあります信州大学教育学部附属松本学校園(附属幼稚園・附属松本小学校・附属松本中学校)及び信州大学松本キャンパスを会場に、今回で第3回目となる信州ラウンドテーブル2018が行われました。

長野県外からの参加者も増え、総勢で309名が集まりました。年々、規模が大きくなっていることに喜びと期待を感じました。

午前中の保育・授業参観及び語る会に続き、その後は会場を信州大学のキャンパス内に移し、本連合教職大学院の松本健一先生による基調講演そして48のグループに分かれてのラウンドテーブルが行われました。

本連合教職大学院の関係者も、実践発表やファシリテーターを担当し、福井での学びや取り組みが、全国各地に確かに根付いていることを実感しました。

楽しさも悩みも分かち合った信州ラウンドテーブル

授業研究・教職専門性開発コース 3 年/福井市中藤小学校 佐藤 琢磨

少しずつ肌寒くなり、秋の深まりを感じる 10 月の終わり、初めて信州ラウンドテーブル(以下「信州 RT」と表記)に参加した。会場の信州大学教育学部附属松本中学校に着くと、大学院でお世話になっていた宮下先生が温かく迎え入れてくださった。

信州 RT では、初めに幼稚園・小中学校の公開授業(保育)を参観させていただいた後、福井教職大の松木先生のご講演があり、午後からラウンドテーブルで実践を報告した。

附属松本中では、幼・小・中一貫の教育が進められている。中学校でも、各教科の授業で子どもの発意から始まり仲間と対話して深めていく、教科や学年を横断した授業が展開されていた。参観させていただいた社会科の授業でも、「カカオ豆を育てているアフリカの少年がチョコレートを見たことも聞いたこともないのはなぜ？」という課題に子どもたちが揺さぶられていた。既習事項から予想を立て、資料検討と話し合いで追究していった。経済的な実情をさらに調べていきたいと、さらなる課題が出て、授業は終わった。授業の展開もさることながら、男子も女子も積極的に発言し、互いの意見を聴き合う温かい雰囲気の中で授業が進んでいたことが印象的だった。

授業の様子は「変化の見えない時代を生きる子どもたちの『資質・能力』を育むために、教師は教授するのではなく、子どもと共に探究していく存在でなくてはならない」という松木先生のご講演の内容ともつながっていた。参観させていただいた授業でも、教師はまさに子どもと同じ「探究者」であり、子どもの問いを丁寧に拾い上げ、新しい問いへとつなげながら授業が展開されていた。

自分の実践を絶えず省察し、「子どもと共に探究する」という姿勢は、私自身も大切にしてきたことだった。ラウンドテーブルでは、長野県で教鞭をとられている先生方と一緒に、それぞれの実践について語り合い、自分自身の実践を振り返った。

奇しくも、私が大学院生として「良い授業とはなんだろう」「学校教育とは何だろう」と悩み始めたのは、長野県の伊那小学校を訪れたことがきっかけだった。M1 の時、小学校 6 年生の社会科で「日本国憲法」の授業をさせて頂いたことがあった。その時の私は「日本国憲法の大切さを伝えたい」「三つの柱の尊さを伝えたい」と、「伝えること」ばかりで必死だった。結

果、教師の思いがあふれ、それが子どもに伝わり、最後の時間の振り返りである子がこう書いてきた。

「先生の思いが強すぎて、みんなの授業じゃない気がしました。1 時間がとてもつまらなかったです。」

伊那小を訪れたのは、子どもの声に私が悩み苦しんでいるときだった。1 年生の「コイさんのために池をつくろう」という総合学習を参観させていただいた時の事。そこには、「コイさんがカラスにとられないよう、深い池を作りたい」と、算数で「深さ」を学習し、水温や温度計の使い方について学び、一生懸命にコイを育て、池に放す子どもたちの姿があった。

「自分の授業との違いは何だろう」と、雷に打たれたような衝撃を受けた。今振り返ると、私の大学院生としての学びは、初めて伊那小を訪れた M1 の冬に始まったのだ。

M2 になり、大学院の講義の企画・運営に携わりながら、授業技術の向上を求め授業実践に打ち込んだ「わたし」。M3 になり、子どもの姿をよく研究し、予想を立て、一度立てた指導案にとらわれることなく柔軟に実践していくことが大切だと気づき始めた「わたし」。そんな私の拙い実践を、先生方は温かく聞いてくださった。

最後には、国語で実践させていただいている『ちいちゃんのかげおくり』の絵本を見ながら、授業について語り合った。先生方が実践した時の授業や子どもの反応。教材研究の勘所。図画工作科や社会科、総合的な学習の時間と横断して学習できる可能性。そして、子どもの語りに耳を傾け、一緒に授業を創りあげていくことの大切さ。参観した社会科の授業や松木先生の講演を振り返りながら、たくさんのことを確認した。

その後も、校長先生から見た学校や、現場で働く先生方から見た学校について、それぞれの立場から語り合った。他の先生の立場から見える学校の姿に耳を傾けていると、いつの間にか、他の方の悩みや喜びが自分の実践と重なって見えた。教師として働くことの難しさを感じながらも、楽しく希望あふれる時間だった。ファシリテーターの先生が、話し合いの中で「こうやって楽しく話を聞き合い、それぞれに得ることがあるとラウンドテーブルはおもしろいね」と

仰ってくださったが、まさしくその通りだと実感した。

最後に、現在、信州大学附属松本中学校の副校長である宮下哲先生をはじめ、ラウンドテーブルでお世

話になった全ての先生方に感謝を申し上げたい。楽しく充実した時間を過ごさせていただき、本当にありがとうございました。

何度でも始点を振り返る

授業研究・教職専門性開発コース2年/附属特別支援学校 吉田 和菜

初めての参加の信州ラウンドテーブル。午前中には信州大学の付属学校での授業参観と講演会、そして午後から5, 6人でのクロスセッションというタイムスケジュールであった。今回も人の優しい先生方の傾聴のもと、報告することができた。

ファシリテーションの先生がとても優しく、報告の際に私の伝えたい思いを整理して言葉にしてくださった。自分は話をするのが苦手だなあと、伝えたいことを言葉にできるようになりたいと思いながら入学して2年。まだまだ言葉が詰まる。しかし、先生方はそんな私にさらに橋渡しするように話をつなげてくださる。集団とはどういうことなのか。集団が先か、個が先か。先生方は私の思いをレポートから察して下さり、そのことについて提起してくださる。保育園の先生からは、保育園は子どもたちから家庭から出て初めての社会である。そんな子どもたちに自己表出のできる子に育ててほしいと思っている。その力を育てないと、いじめられても痛みを感じない子になってしまうと。小学校の先生からは、気になる子がいて、その子は別のことをしていても許される、それが甘くしすぎているようにも感じると悩まれていた。中学校の先生は、社会から受け入れられる為に最低限、同じ場に居る適応のできる子に育ててほしいと話された。ファシリテーターの先生は、他校種の現状として集団が画一されたものになってしまっているという話をされた。先生方の話を聞いて、私が悩んでいることを整理する機会になった。残念ながら行きついた先というもの

はない。しかし、目の前の子どもたち一人ひとりと関わっていくことをしていきたいと思った。個と集団、どちらが先かどちらが大事かではない。どちらも大切なのだろう。

その後も私の報告に繋がるように、報告の補足をしてくださる先生方の報告があり、先生方の心遣いにまた気づく。その後の報告では、担任として子どもたちに響く語り方ってどのようなものかという相談、外国語活動における学校の目指す「ことばの豊かさ」ってなんだろうと苦悩しながら授業をされている先生。報告された先生の中には「今更の悩みだけど、変なプライドもあるけれど今こうやって話せてよかった。この悩みをそのままにしないでよかった」と言葉を漏らす先生がいらっしまった。私は同じテーブルを囲んだ迷い悩む先生方のその謙虚さに私もそうでありたいと思った。

私はとても頑固である。しかし、その頑固さはよく働くこともあれば、自分の道しか見えずから回ることも多々ある。悩み続けることは優柔不断とは言わない、一つに決めてしまうことは、強いといえど強いかもしれないが綻びが出ることもある。それならば、常に綻びと向き合っていける人でありたい。そのためにも人と対話すること。これは欠かせないのだなと痛感する。私と違う人の中に私も繋がるものがある。それらが刺激し合いながら、見つかるものがあるのだろう。福井の2月のラウンドテーブルを楽しみに待ちたい。

信州ラウンドを終えて

授業研究・教職専門性開発コース1年/奈良女子大学附属中等教育学校 西澤 央泰

今回初めて、福井以外でのラウンドテーブルに参加した。最初は、参加する気はなかったのだが、担当教官の先生の「信州のラウンドテーブルに参加しなさい。」という一声によって、慌てて応募した。しか

も、大学院から送られてきているメールをよく見ておらず、ラウンドテーブル中に行われる報告をするかしないかの欄があり、最初は「しない」に印をつけていたが、メール文中に、「ラウンドでは報告をして

ください。」との旨が書かれており、嫌々ながらも、報告「する」に印をつけて準備を始めた。

今から思えば、このラウンドテーブルは自分にとって有意義なものになったと思う。自分が最も有意義であると感じたのは、自分があれほど嫌だと思っていた、実践報告の場であった。

自分は本当に報告の場が苦手である。というのも、自分自身のことを、自分の「物語」に沿って語ることが苦手だからである。これまでの報告では、自分でも何を言っているのかわからなくなってしまうことが多々あった。加えて、自分自身がこれまでのインターンの中で、何か「実践」と呼べることをしたという感覚がなかった。今までの自分の考えでは、現職の先生方はすでに教師として働いておられるから、自分の実践もあり、語ることができるが、ストレートマスターとして行っていることは、ほとんどが授業や学校生活の観察（自分ではしっかりやっていたつもりだが、自分ならどうするかという視点からはまだまだ考えられていない）であり、ストレートマスターとしての実践とは何かについて悶々としたものを持っていた。「実践とは何か？」という安直な疑問に先生方に回答していただいた。

グループの先生方からは、「まずは、具体的に授業やいろんなことをさせてもらえるように、自分からいくことから始まるんじゃない？」という言葉いただき、自分の心にのしかかるものがあつた。これまで、自分は先生方から指示を受けたことをやっていくだけで、自分から何かしたいということを訴えて

こなかった。自分の大学院生という立場上、させてもらえることなんて限られていると勝手に思い込んでいた。だが、これらはただの思い込みであり、自分が、先生方とコミュニケーションをとってつながりを作り、そこから自分の取り組んでみたいことを、先生方と相談しながら行うことで、自分の学びは広がる上、自分の実践と呼べるものが作り上げられるのではないかと思う。頼まれるのを待つのではなく、自分から仕事を作り出し、実践していくことが大学院での学びの形であることによりやく気付くことができた。今回のラウンドテーブルでは、自ら仕事を作り出すことを後押ししてもらえたと同時に、自分の実践を作り上げていくための覚悟ができたと感じている。

これに気づけたからといって、この先、自分から動いて何か動きを生み出していかないことには意味がない。自分がこの学校で学ぶために何ができるか。また、学校のために自分が、何ができるか。これらに気づいたり、アイデアが出たりしたところで、行動に移すということから始めたい。具体的には、まずは、自分から様々な先生方に話しかけに行き、自分の居場所を作ると同時に、先生方の現状を知り、自分にできることはないかを、探していくことである。そして、できることが見つかった時にはすぐにその先生のもとに行き、自分がさせてもらいたいことを伝えることを手段として、実践を作り上げていきたい。今まで閉じこもっていた殻を破るチャンスをいただけたラウンドテーブルであった。

信州ラウンドテーブルでの気づき

授業研究・教職専門性開発コース1年/奈良女子大学附属小学校 藤田 若奈

「ぎんなん、いりませんかー！」朝、信州大学附属松本小学校の校舎に足を踏み入れると、子どもたちの元気な声が廊下に響き渡っていました。低学年くらの子どもたちが参観者に真剣な顔で必死に呼びかけており、私も一人の男の子に導かれて银杏を一つ買ってあげました。すると周りの子どもたちの顔も明るくなり、売れたことを一緒に喜んでいるのが伝わってきます。見ず知らずの大人に必死に呼びかけ、一つ売れると共に喜び合い、活気があって何事も楽しむ子どもたちの姿が見られました。银杏を手に階段を上がっていくと、今度は子どもたちの楽しそうな歌声が聞こえてきました。6年生の教室からです。覗いてみると、みんなで輪になって歌っていました。

互いに笑顔を向け合い、足でステップを踏んだり、体を揺らしたりしています。その光景は、担任の先生が教室から出ていかれた後も続いていました。高学年になると、歌うことに対して恥ずかしさを感じたり、わざと手を抜くような素振りを見せたりすることも多くあると思われますが、ここの子どもたちは音を体で感じながら、みんなと歌うことを本当に楽しんでいるように感じられます。

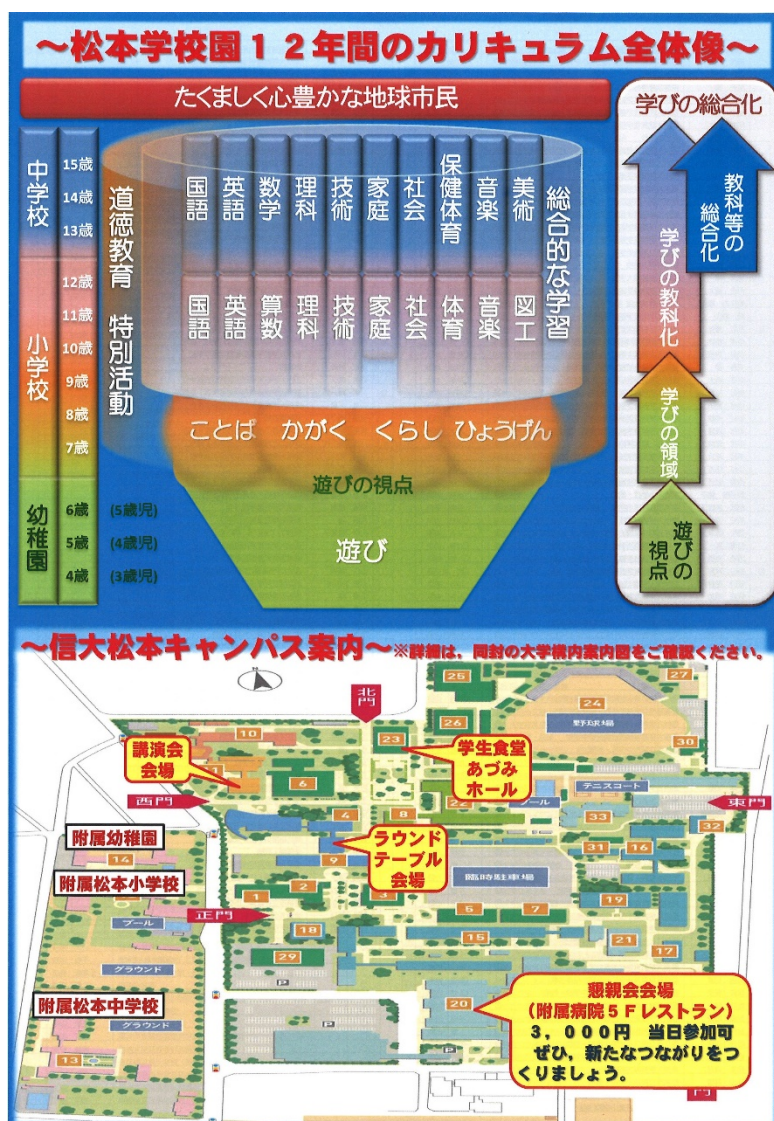
いよいよ、公開授業が始まりました。私は5年生の道徳を参観させて頂きました。教室に入ると、緊張しているのか、ぴんと張り詰めた空気が感じられ、静寂な時間が流れていました。担任の先生が2種類の花を持って来られました。「これ本物?」「人工じゃ

ない？」教室がどよめき出します。栄養を渡らせるために他の芽を間引き、枯れないよう大切に育てられた、一輪の大きな花を咲かせる一輪菊。一方で、他の芽を間引くこともなく、枯れても次から次へと芽吹く、小さな花を沢山つけた小菊。「自分が菊だったらどちらの育て方をするか」という問いが投げかけられました。大人でも簡単に答えを出せない、考えさせられる問いに感じられます。「一輪菊は迫力があっていい」「一つのことを極めているからいい」「でも、枯れたら終わりじゃん」悩みながら、ゆっくりと考えが絞り出されていきますが、たったの45分では答えは見つけれません。後の協議会で「今後も子どもたちと、そして自分も、菊とストーリーをつくっていきたい」と担任の先生が仰っていました。答えを早急に出そうとせず、じっくりと自分を見つめ考える時間を大切に、また先生自身も考え続けていくという姿から学ぶことが多くあると思いました。また、授業中、先生が子どもたちのこぼす小さな呟きを拾う場面が見られました。子どもの小さな声をも受け止める、そのような先生方だからこそ、朝の生き生きと銀杏を売る子どもたちや、楽しそうに笑顔を向け合って歌う子どもたちのような、あたたかい光景を見ることができたのだと思いました。

午後になり、大学に移動してラウンドテーブルに参加しました。様々な校種の先生方と交流させて頂く中で、幼稚園の先生のお話にハッとさせられました。「子どもは、いきなりやれと言われてもできない。子どもが何を楽しんでいるのかをよく見て、それが友だちにも目が行くように環境構成をする必要がある。」それを聞いて、学部生の頃の幼稚園実習である場面を思い出しました。幼稚園では「自由選択活動」といって、子どもたちが今日やりたいことを自ら見つけて活動する時間がありました。ここでは「自ら選択する」ということが子どもの学びとして重要とされており、先生方は子どもたちが出会う「環境」そのものを、教育的に考えて意図して「構成」されています。私の実習期間中、春の草花を摘みに行く活動を取り入れることになりました。けれども「今から草花を摘みにいきますよ。」と言ってみんなを連れて行くことはしません。前日、事前に草花を摘んで種類別に机の上に飾っておきました。すると次の日

の朝、さっそく数人の子どもの目にとまりました。その子たちは飾ってある草花を全種類見つけたいと言って、園庭に出かけていきました。すると、それを見ていた子どもたちも「おもしろそう」と次々に草花を探しに出かけていきました。

この場面を思い出して、今、インターンシップでの授業実践において悩んでいることと繋がるように思いました。私は、子どもたちと共に学習をつくる授業を目指しています。けれども、子ども一人の考えを取り上げただけで子どもと学習をつくっている気になり、それを全員に考えるように設定したため、他の子を枠に押し込め苦しめることになってしまいました。「おもしろそう」と言って自ら選択するからこそ主体的になるのであり、これでは主体的でも、子どもと学習をつくることにもなりません。ここでも、子どもたちが「おもしろそう」と自ら選ぶよう「環境構成」をし、それが友だちに広がっていくようにつないでいく働きが必要だと思われます。まだ具体的な手立ては思い浮かびませんが、これを意識して次の授業実践に臨みたいと思います。





国立大学法人福井大学教育学部附属
義務教育学校

第1回 教育研究集会の御案内 (第2次)

研究主題 (第I期)

**自律的な学びへのイノベーション
探究するコミュニティを培う**

研究副題 (1年次)

**つながり合って学びを紡ぐ授業をデザインする
協働探究カリキュラムをデザインする**

期日 **平成30年11月30日 (金)**

会場 **福井大学教育学部附属義務教育学校**



学校HP QRコード



文部科学省指定研究
「社会創生プロジェクト」
研究開発校

OECD Education 2030
OECD ISN 2.0実践校
探究チーム福井

主催／福井大学教育学部附属義務教育学校
後援／福井県教育委員会 福井市教育委員会
福井県小学校教育研究会 福井県中学校教育研究会

第1回 教育研究集会 全体会/シンポジウム

期日：平成30年11月30日（金） 場所：福井大学教育学部附属義務教育学校 北体育館

テーマ「未来社会を創る協働的主体性を育む ～協働探究カリキュラムのデザイン～」

これからの社会に必要なキー・コンピテンシーは何かを明らかにし、それを培うためのカリキュラムをデザインすることに、今世界が協働して開発研究しています。OECDでは2015年からOECD Education 2030 プロジェクトを展開しており、日本でも新学習指導要領の改訂において、資質・能力に基づいた再整理をおこなってきました。シンポジウムでは、文部科学省教育課程企画室長の白井氏と、OECD ISN（日本イノベーション教育ネットワーク）の研究総括を務める秋田氏、OECD教育スキル局の田熊氏、そしてご来場された方々と一緒に、公開授業などでの子どもたちの学びの様相を基に、これからの学びの在り方や学校教育の使命について考えていきたいと思います。

シンポジスト

秋田 喜代美 氏

（東京大学大学院教育学研究科 教授）
（日本イノベーション教育ネットワーク 研究総括）

立教大学文学部助教授を経て、現職。発達保育実践政策学センター センター長、文部科学省中央教育審議会教員養成部会委員



専門は教育心理学、発達心理学、保育学など。世界授業研究学会(WALS)副会長や「ふくいの教育振興推進会議委員」も務める。主な著書「対話が生まれる教室」「社会情動的スキルへ学びに向かう力～」「岩波講座 教育 変革への展望」など多数

白井 俊 氏

（文部科学省初等中等教育局教育課程課 教育課程企画室長）

生涯学習政策局、高等教育局などでの勤務後、平成27年よりOECD教育スキル局アナリストを務め、平成29年度より現職。



教育課程企画室長として、新学習指導要領の改訂や、研究開発学校制度などを担当。OECD在職時から「OECD Learning Framework 2030」の構築に携わる。「初等教育資料 平成30年5月号（No.967）教育資料 教育とスキルの未来：Education 2030」など

田熊 美保 氏

（OECD教育スキル局 シニア政策アナリスト）

UNESCO教育センター、OECD教育局教育研究革新センターにて外務省派遣アソシエートエキスパートなどを経て、現職。



専門は異文化教育、教育政策国際比較、教育政策評価など。「OECD東北スクール」プロジェクトマネージャーを務める。現在はパリ本部に勤務。OECD Education 2030 プロジェクトマネージャーを務めている。著書に秋田氏との共著「岩波講座 教育 変革への展望」など

コーディネーター

牧田 秀昭

（本校後期課程 副校長）

元 中央教育審議会 教育課程企画特別部会 委員

「教える空間から学び合う場へ（秋田先生と共著）

「中学校新学習指導要領の展開 総則編（分担執筆）」など



Schedule

12/25 Tue – 12/27 Thu 冬期集中サイクル1a 12/28 Fri 1/4 Fri – 1/6 Sun 冬期集中サイクル1b
1/28 Fri 長期実践研究報告提出〆切 2/3 Sun 長期実践研究報告会
2/15 Fri – 2/17 Sun ラウンドテーブル2019 Winter Sessions

【編集後記】秋は、福井県内始め全国各地で他大学主催のラウンドテーブルや、各学校の公開研究会等が数多く行われています。本連合教職大学院の院生及び教職員も、様々な場所に出掛け、積極的に参加しておられます。その報告を読ませて頂くと、他の方の授業を参観したり、自分の実践を発表したりすることが、確かに自らを振り返る貴重な機会の一つとなっていることを強く感じます。私たちの学びの上でも、実りの秋を実感する季節のように感じられます。（中島）

教職大学院 Newsletter **No.116**

2018.11.10 内報版発行

2018.11.30 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp